

17.  $^{51}\text{Cr}$  による真の血小板寿命の測定法

## —アスピリン法との比較

○緒方 完治 鯉江 捷夫  
 神谷 忠 高松 純樹  
 (名大・1内)  
 斎藤 宏 小原 健  
 芝宮 勝人  
 (同・放)

目的：血小板血症および chronic ITP に、 $^{51}\text{Cr}$  標識法と Aspirin 負荷法を同時に施行して、両測定法を比較して、 $^{51}\text{Cr}$  標識法における真の血小板寿命について検討した。

対象症例および方法：血小板血症として本態性血小板血症 6 例、真性多血症 1 例。年齢 33～69 歳の男 3 例、女 4 例と ITP として 49 歳の男 1 例である。血小板寿命の測定は  $^{51}\text{Cr}$  標識法は塚田らの方法、Aspirin 負荷法は寮らの方法に準じて行なった。

成績：血小板血症による  $^{51}\text{Cr}$  法による成績、Half-Life T 1/2 (day) 4.4, 3.4, 3.9, 4.5, 4.5, 2.9, 3.3, 平均  $3.8 \pm 0.7$ . Aspirin 法では、3.8, 3.7, 5.1, 5.3, 4.1, 3.6, 2.8, 平均  $4.1 \pm 0.9$  であり、両者とも相近似した値であった。両測定値に一定の傾向は認められなかつたが、Aspirin 法による値は正常者 10 名の成績に比しやや短縮傾向を認めた ( $p < 0.05$ )。 $^{51}\text{Cr}$  法で症例 4, 5 で第 1 日目に % radioactivity が急激に減少し、以後直線的に経過したため直線部分で求めた。chronic ITP 症例では  $^{51}\text{Cr}$  法 T 1/2 2.2 (Lifespan 9.9), Aspirin 法 T 1/2 3.3 (7.0) であった。この場合  $^{51}\text{Cr}$  法による elution rate は約 15 % と考えられた。

総括：血小板血症では両測定法による成績は相近似しており、臨床的にはいずれも有用と考えられた。 $^{51}\text{Cr}$  法による寿命測定においては、in vitro での操作などが加わり、輸注早期に  $^{51}\text{Cr}$  elution する可能性があり、ITP ではこの傾向がより強いと考えられた。

## 18. 塩化インジウムによる骨髄シンチグラフィー

○井野 晶夫 平野 正美  
 (名保衛大・内科)  
 竹内 昭 河合 恭嗣  
 江尻 和隆 古賀 佑彦  
 (同・放)

造血能分布の評価法の一つとして、体内でトランسفエリンと結合し、赤芽球系に集積するとされている  $^{111}\text{In-Chloride}$  を用いて骨髄シンチグラフィを行ない、17例についてその結果を報告した。 $^{111}\text{In-Chloride}$  2 mCi を静注し、48 時間後にスキャンを行なった。再生不良性貧血症例では、まったく造血髄を認めないもの、下腿、上腕などに孤立性島状の造血巣をみとめるものがあった。慢性骨髄性白血病、真性多血症では正常造血髄のほか、四肢の造血髄の拡大および腫大した肝、脾の高い activity を認めた。急性白血病では、治療による造血髄の変化もあり評価は困難である。非定型白血病の 1 例では、膝関節、足関節付近に activity を認めた。急性リンパ性白血病の寛解期の 1 例では、正常の造血髄のほか、四肢に造血髄の拡大を認めた。

$^{111}\text{In-Chloride}$  は明瞭な造血髄の部位と広がりを知ることができ、有用であった。再生不良性貧血の重症度とシンチグラムの関連性、鑑別困難な前白血病状態、非定型白血病、再生不良性貧血におけるシンチグラム上の差異は興味ある点で、さらに肝、脾の集積と髄外造血との関係は未だ十分解明されず今後検討したい。

## 19. 甲状腺 RI アンギオにおける diffuse hypervascular 所見の臨床的意義

○分校 久志 桑島 章  
 利波 紀久 久田 欣一  
 (金沢大・核)

結節性甲状腺腫を含む甲状腺腫のルチン検査として行なった RI アンギオグラフィーにて、甲状腺全体に血流増加のみられる diffuse hypervas-